

「底が突き抜けた」時代の歩き方 373

フセイン政権崩壊後のイラクで何が起きているのか

まず、イラク戦争といわずに、イラク攻撃という言葉使いを今後行っていきたい。それは、戦争というにはあまりにもおこがましいほどに、イラクに対するアメリカの一方的な戦闘行為でしかなかったからだ。軍事面だけでなく、戦死者の数においても、そのことはいえる。慶応大学教授の金子勝と立教大学助教授のアンドリュー・デウィットによる連載時評（『世界』03・6）によれば、それは次のような数字として表わされている。

《イラクが毎年約13億ドルを防衛に支出しているのに対し、2003年度米国軍事費はおよそ3700億ドルであった。そのため米軍は戦争のどの面をとっても支配的であり、1万5000の精密誘導兵器、7500の重力爆弾、そして750の巡航ミサイルでイラク軍を攻撃したのである。米軍はまた多くのデジカッター爆弾やクラスター爆弾を投下し、劣化ウラン弾を大量に使用するなど、大量破壊兵器を使って大規模な殺戮を行った。死亡したイラク軍兵士の正確な人数は判明しないだろうが、おそらく最大1万名に上ると考えられる。死亡したイラク市民の数は増え続けており、4月21日の時点で最大2325名と推測されている（www.iraqbodycount.net参照）。アフガニスタンでも市民の死者が既に3000名を超えている。これから、確認されてゆくイラク市民の死亡者数も増えることは確かだろう。一方、米英連合軍の戦死者は200名以下であり、そのうちの多くがいわゆる「友軍誤射」によるものである。》

筆者たちは、アメリカは圧倒的な軍事力によってフセイン政権を崩壊させはしたが、《無実のイラク市民を大量に殺戮した》だけでなく、結局のところ、《ただの混乱と無秩序》をもたらしたにすぎないことにも言及する。

《「イラク・フリーダム」という急ごしらえのスローガンも空々しい。バグダッドでは略奪が横行し、ゲリラ攻撃や自爆攻撃も止まっていないからだ。少なくとも10万人を超えと言われた共和国防衛隊も大統領挺身隊も、指揮系統が崩壊したとはいえ、完全な武装解除もないまま町中に消えた。イラクに入国した4000人と言われるアラブ義勇兵もまだ潜んでいるかもしれない。一方、反体制派も四分五裂の状態だ。クルド人組織は米軍と協力してイラク軍を攻撃したが、トルコはその勢力拡大を望んでいない。15日にイラク南部のナシリアで開かれた暫定政権機構準備会では、米国占領に反対しイランに本拠地を置くシーア派最大組織SCIRI（イラク・イスラム革命最高評議会）が欠席した。

こうして見れば分かるように、ブッシュの戦争がイラクにもたらしたものは、ただの

混乱と無秩序である。イラクの状況はしだいにアフガニスタンに似てきている。アフガニスタンでは、米軍の大規模空爆によってタリバン政権を崩壊させたが、結局指導者たちは捕まらず、再びタリバン勢力が徐々に戻りつつあるからだ。その結果、カルザイ大統領はCIAのボディガードなしには、移動できない状況に陥っている。イラクでも、大量の米軍が駐留を続けざるをえないだろう。》

軍事面や戦死者数だけでなく、メディア操作においてもアメリカはイラクの比ではなかった。象徴的な二つの報道を取り上げてみる。一つは、ラムズフェルド米国防長官が『ベルリンの壁』や『鉄のカーテン』の崩壊を思い出さずにはいられない」と語った、4月9日にバグダッドでフセイン大統領の像が引き倒された生中継の映像である。もう一つは、美人上等兵ジェシカ・リンチ救出の“美談”報道である。

前者については、『サンデー毎日』(03・4・27)でジャーナリスト佐藤和孝(47)＝ジャパンプレス代表が、「テレビに映らなかったあの日のバグダッド」報告を行っている。《外電によれば、9日午後5～6時ごろ、大統領像の周囲に市民が集まり始めた。ハンマーで台座を壊したり、像の首にロープをかけて引っ張ったりしたが、倒れない。結局、午後6時50分ごろ、海兵隊員が作業車両を使って引き倒した。数百人の市民からは歓声が上がり、倒れた像を踏みつけて喜ぶ市民もいた。》しかし、「あまりにも予想通りの展開でした」「僕は戦争が始まった時、米軍は最後にここ(ホテル前の広場)に来て、像を倒すだろうと思っていた。外国の報道陣が集まる所でやるのが一番効果的ですからね」という佐藤氏は、「計算ずくの完全な演出ですね。ルーマニアのチャウシェスク政権が崩壊した時のような、民衆のエネルギーはまったく感じられなかった」と見る。《市民の一人は「まるで映画を見ているようだ」と話していたという。

佐藤氏が見た像引き倒しの一部始終はこうだ。

最初、誰もいない広場に戦車など数十両の車両部隊が入ってきた。車両は広場に展開し、出てきた兵士が広場の各所へ配置についた。

30分もたたないうちに、10～20人のイラク人の集団が何かを叫びながら現れた。集団はまず、ホテルのロビーに入り、壁にかかっていたフセイン大統領の肖像画を持ち出して広場で火をつけた。

その後、集団は像の首にロープをかけ始めた。他の市民も集まりだし、最多時は150～200人になった。

像を倒すのに使われた米軍車両からは、米兵が携帯食料を持ち出し、市民にばらまいていたという。

最初に現れた集団が何者なのかは不明だが、この集団が先導する形で像の引き倒しが始まったようだ。

遠巻きに見守る市民の中には、泣いている人も少なくはなかった。なぜ泣くのか。

「自分たちの国がなくなってしまった。どうしようもない虚脱感だ」

「フセインは嫌いだった。でも、他国人に入ってしまったのが悲しい」

佐藤氏の取材に、そんな答えがかえってきたという。》

後者については、産経新聞（０３・６・１８）が《イラク戦争のさなか、イラク側の捕虜となっていた米軍女性上等兵ジェシカ・リンチさん（２０）が劇的に救出され、米国内を沸かせたが、１７日付の米紙「ワシントン・ポスト」は、この救出劇をめぐる当初の報道に真相と大きく異なる部分があったとして、あらためて取材し直した記事を掲載した。同紙は、ホワイトハウスや国防総省に、リンチさんをめぐる“神話”を作り上げようという意図があったと指摘している。》という記事を掲載している。この記事によると、「真相」は次のようなことらしい。

《救出劇の最大のクライマックスは、４月１日、リンチさんが捕らえられていたナシリヤの病院に特殊部隊が突入した時だ。当初、病院の外で展開された撃ち合いをぬって特殊部隊が院内に突入したといわれていたが、実際は撃ち合いの事実はなく、院内にいたのも、医師ら医療スタッフだけで、イラク側の抵抗は一切なかった。

リンチさんは、救出されたときに撃たれたり刺されたりして負傷の程度がはなはだしいと伝えられたが、そういう傷も実際にはみられなかったという。

一方、リンチさん救出のきっかけとなったのは、イラク人弁護士が、看護婦の妻に会うために同病院を訪れた際に、フェダイーン・サダム（サダムの戦士）のメンバーから尋問を受け、平手打ちにされているリンチさんを見つけ、米軍に通報したことによる、といわれていた。しかし、病院関係者の証言では、暴行の事実はなく、また弁護士の妻といわれる看護婦などはこの病院にはいないことも判明した。

ポスト紙は、当初の記事に対し、状況を知っている人たちからの批判が相次いで寄せられたことを明らかにし、あらためて数十人にインタビュー、当時の真相はどうだったのかを取材し直したと説明している。》

『フライデー』（０３・５・２）は、《この美談に広告代理店が関係していた可能性が浮上してきている》という。国際政治学者の浜田和幸はその記事の中で、「開戦３日前の３月１７日に、『モーフェイス』というニューヨークの広告代理店の役員が『ジェシカ・リンチ』という名前のドメインを３つ取得しています。モーフェイスは米海軍や航空会社を顧客に持つ中堅の代理店です。その役員は、取得した理由を同姓同名の“ミス・ニューヨーク”の宣伝活動に利用するためだといっているのですが、彼がいうようなホームページは存在しないのです」と証言する。記事は、《もし本当に、ジェシカさんに広告代理店が事前に関与していたのであれば、“救出劇”は開戦前から仕組まれていた、とんだインチキということになる》と述べ、これまでも《「戦争広告代理店」と呼ばれる企業が、血塗られた戦場を巧妙に美化してきた歴史があ》り、《湾岸戦争の際にも、油まみれの海鳥の映像が、イラクによる油田破壊の象徴として繰り返し報道された。しかしのちに、それがまったく無関係な場所で撮影されたものだ」と判明したことは有名な話である。》と記している。

こうした“ヤラセ”が横行するのは、『フライデー』も指摘するように、誤爆や虐殺

の事実の隠蔽を意図するものにほかならないが、それ以上に受け取り手の記憶の固定化を狙ったものということができる。たとえば、湾岸戦争の際の《油まみれの海鳥の映像》にしても、《イラクによる油田破壊の象徴として繰り返し報道された》ことの当初の印象のほうが、《のちに、それがまったく無関係な場所で撮影されたものと判明したこと》による打ち消しよりもはるかに強度なのである。それに不思議なことだが、最初の報道は何度も繰り返されるのに、その打ち消しのほうは控え目にしか行われないうちに、打ち消しに気づかない人も多く、また打ち消しを目にすることがあっても、当初の報道の打ち消しはその報道によって受けた衝撃や記憶の打ち消しにまで至らないか、打ち消しに対する心理的抵抗が生みだされてくることがありうる。ボスニア紛争でボスニア政府がアメリカのPR企業と契約して、宿敵セルビアに貼り付けた「民族浄化」「強制収容所」のキャッチコピーの威力は強大で、舞台裏が判明しても、一度刷り込まれた印象は私のなかでもなかなか抜け切らない。

バグダッドでのフセイン大統領の像の引き倒し映像にしても、ジェシカ・リンチ上等兵の救出劇「神話」にしても、いつまでも隠しおおせるものではなく、やがて真相が明らかにされる「ヤラセ」であるのに、ホワイトハウスや国防総省がそのような場面を演出したり、「美談」を作り上げようとするのは、仕組まれた物語であれ何であれ、人々の関心が「感動」や「興奮」に引き寄せられる強度は、それらがフィクションにすぎないことが判明する真相の受け止めをはるかに上回ることを充分承知しているからだ。一度犯人扱いされた者はたとえそれが濡れ衣であることが報道されたとしても、犯人扱いされた報道のほうが濡れ衣報道よりも人々の心に強く残るのと同じことなのである。

現に先の産経新聞によれば、救出劇「神話」が完全崩壊しているのに、ジェシカ・リンチの独占取材をめぐる契約合戦は加熱しており、《4大ネットワーク局の一つCBSは、芸能番組を含めた出演を提案するなど、もはやニュース報道を超えて芸能番組になりかねない様相》で、彼女が入院しているウォルター・リード陸軍病院の広報担当は、「ネットワーク局から数え切れない提案がきているが、それらはすべて芸能ジャンルに入りそう。出版でなければ、二時間の映画になりそう」と打ち明けるのに対し、問題の所在はそんなところにはないのに、ニューヨーク大のジェイ・ローゼン教授（ジャーナリズム論）は「ジェシカさんのような事件が起きれば、メディアの制限はなくなる」と指摘したり、別の専門家も「ジャーナリストの売り込み文句は“あなたの話を全米に伝えたい”だったのが、いまや“あなたをスターにして百万長者にする”に代わってしまう危険がある」と懸念する愚かさが駆け巡っている。

「嘘」でも「ヤラセ」でも何でもよい、とにかく一度強烈な「事実」を作り上げてしまえば、たとえ後日真相が明らかにされたとしても、一般の人々が最初の「事実」の枠組みから抜け出して、自分の頭で判断するようになるのは極めて困難であるという、ブッシュ政権が用いたようにみえるこの心理的洞察は、今回のイラク攻撃の背景を貫いているのが感じられる。大量破壊兵器を持っているかいないかにかかわらず、攻撃を仕掛け

てフセイン政権打倒という既成事実を一旦作り上げてしまえば、人々はこの既成事実の枠組みでしか思考を巡らす以外になす術をもたないだろうということなのだ。先に引用した金子・デウィットの文章が次のように書いているのを読むと、つくづくそんな思いがこみ上げてくる。

《まずブッシュ政権は、9・11同時テロの犯人をアル・カイダと決めつけ、証拠もないままアフガン攻撃を始めた。しかし結局、ビン・ラディンは捕まらず、戦争はアフガニスタンの秩序を崩壊させるだけに終わった。今度は、アル・カイダとフセイン政権がつながっており、フセイン政権は核開発計画を持っているとブッシュ政権は言い出した。何度か述べたように、2月5日の国連安保理でパウエルが挙げた「証拠」は捏造されたものだったにもかかわらず、米国政府はイラク戦争を始めた。だが、ここでも大量破壊兵器とフセインを見つけられなかった。結局、イラク戦争がもたらしたものはアフガニスタンと同じく秩序の崩壊だけである。さらに、4月半ば以降、タカ派はシリアに矛先を向け始めた。ワールド・トリビューン紙（2003年4月15日付け）が報じたように、タカ派は、「イラクの生物、核物質と科学者の流出によってシリアは、米国と中東の同盟国にとって新たな大量破壊兵器の脅威となるかもしれない」と主張している。

つまり、証拠があろうがなかろうが、ブッシュ政権は反米的な政権を攻めては次々と内乱と無秩序を作り出す。それがテロリストの基盤を醸成する。そして、標的とされた人物が逃げ込む先を勝手に作っては戦争を仕掛けてゆくのだ。すでに、こうした際限なき戦争の悪循環が始まっている。それゆえ、シリア、イラン、北朝鮮がいつ標的になってもおかしくない。》

《証拠があろうがなかろうが、ブッシュ政権は反米的な政権を攻めては次々と内乱と無秩序を作り出す》なかで、“ヤラセ”の映像を演出し、感動的な“美談”を作り上げて、人々の頭の中にも《次々と内乱と無秩序を作り出》していく。フセイン政権崩壊後のイラクの現実の前では、すでに大量破壊兵器云々の問題は過去の出来事のように取り扱われてしまう空気が醸成されつつあり、したがって、千葉一幹が宮台真司著『絶望から出発しよう』の書評（『文学界』03・6）の中で、こう嘆息する所以でもある。

《……気鬱になるのは、予想外に簡単にフセイン政権が崩壊したことで、どう考えても正当化の難しい米英等によるイラク攻撃が、正当なものであるかのように見え始めたことによる。アメリカの空爆等で多くのイラク市民が犠牲になったことは事実だが、その犠牲者はフセイン体制が続くことで不当に死に追いやられる国民の数より少ないかもしれない。また独裁者を追い出したのはアメリカ軍でもあることも事実だ。手段よりも結果を重視する政治において結局アメリカは正しかったのであり、仏独等の攻撃反対はなんだったのかということになりつつある。》

書評という文章の性格上、《先制攻撃も辞さない力による正義の実現というブッシュ・ドクトリンに対して、世界は有効なオルタナティブを提示できないでいる。むしろ9・11以降アメリカの取る、力による正義の実現という方法が、世界を貫徹していくよ

うである。そこにあるのは、力による正義の実現以外の方途がない、宮台がいう、システムに外部がないことでもたらされる閉塞感・絶望感である。そしてそれは、あるパースペクティブに別のパースペクティブを対置することで可能なはずの価値の相対化が出来ないことも意味している。アメリカの提示するロールモデルに意味を見出せないわれわれは、深く絶望しつつ、そこからの出発の方途を見つけ出せないまま援交に走るＡＣ系の優等生のようなのだ。》というように続くが、その《９・１１以降アメリカの取る、力による正義の実現という方法》が、“目的のためには手段を選ばず”とか、“終わりよければすべて良し”といった目的主義、結果主義の愚昧さ、野蛮さを大きく内包していることにも注目しなければならない。この愚昧さ、野蛮さにおいて、《力による正義の実現という方法》自体が破綻していることは明白だからだ。

よく考えれば、フセイン大統領の像の引き倒し映像やジェシカ・リンチ救出“神話”以前に、我々はマスコミによる残酷なフセイン政権の恐怖政治というプロパガンダによって、北朝鮮の国民のように、イラク国民の疲弊、萎縮したイメージを植え付けられてしまっている。しかしながら、いくつかの開戦前の現地レポートに目を通す限りは、そんなイメージが吹っ飛んでしまうほどのイラク人の人なつっこい朗らかさがどの報告からも伝わってくる。ＮＧＯ「アラブイスラーム文化協会」の市民調査団の一員であるフリーの映像作家、森元修一（３２）の、２月１７日夜にバグダッド入りした現地報告（『週刊朝日』０３・３・７）によれば、《街の雰囲気は、とても自由》で、《市民の危機意識の低さ》に驚かされ、《商店街では女性たちが顔を隠すでもなく、マニキュアやアクセサリーを買っている。私がビデオカメラを持っているとわかると、大人も子どもも、我先に撮ってもらおうと、気さくに集まってくる。》

《物資の不足、日用雑貨の買いだめ、国外への脱出》といった動きも見られず、《バグダッド市内には米国文化があふれて》おり、商店街のＣＤショップの《店内には米国人の女性歌手、ブリトニー・スピアーズの、肩まで露出させたセクシーなポスターが張られている。２０代と思われる男性店員が、自分で張ったと笑う。彼は、店のパソコンの壁紙も、ブリトニーでそろえるほどの大ファンでした。》トム・クルーズやブラッド・ピットのポスターも店の壁に並べられており、繁華街の映画館では米国のアクションスター、ジャン・クロード・バン・ダム映画。食堂での家族連れは一枚の大きなピザを囲むコカ・コーラやセブンアップ。「私たちは米国の政府は嫌いだが、米国のピープルは好きだ」と、宿泊先のホテルの従業員は説明する。物価もずいぶん安く、バグダッド市内には多くの日本人が入っており、「イラクの姿を日本に伝え」るために来たという、イラク人は非常に嬉しそうな顔をする。

日本人を見ると町中で笑いながら空手のポーズをしたり、サッカー好きのイラン人は「ナカター、イナモトー、タカハラー」と連呼したりする。２０日に訪れた市内の《幼稚園の壁一面に描かれていたのは、ミッキーマウスを先頭に、ディズニーの人気者ばかり。イラク人は、本当に米国文化が好きらしい。》小学校では友達同士で撮影してもら

うために、持参した使い捨てカメラを児童に渡すと、《カメラを手にしてから、子どもたちの表情は緩み、大騒ぎの撮影会となりました。先生が静かにさせようと注意したほどです。子どもたちの無邪気さは、どこの国も変わらないと実感しました。》

02年10月末から二週間ほどイラクに滞在した作家の池澤夏樹も、『サンデー毎日』（03・5・18）でイラク人や子どもたちについて、こう語っている。《しばらく歩いてみて「結構、いい国じゃないか」と思った。渡航前は、悪い情報ばかり聞いていたから、これはショックでしたね。みんな明るいし、やたらと人なつこい。出会ったばかりの外国人なのに、「お茶を飲め」「メシも食べて行け」と。客好き、なんですね。イラク攻撃をめぐる国連安全保障理事会でのやり取りは、ニュースでみんな知っている。緊迫した事態なのに、遺跡見物に来ていた米国人の観光客すら、「楽しい旅だ」って言うてたくらいです。》《現地で一番強く惹かれたのが、子どもたちの表情です。やたら元気で明るくて、汚れてて、走り回ってる。振る舞いの奔放さ、というか「もともと子どもって、こういうものだよなあ」と素直に思えました。それに、家族の関係がすごくいい。親も周囲の大人も、きちんと子どもを育てようとしている。子どもはそこからリーダーシップや協調性、時には反抗とかを学んでいる。偏差値では測れない勉強をしているんです。そういうふうに子どもが育つ国というのは健全だと思います。》

また、《とにかく日本にいたら命を賭けるに値するものなんて何もない！ このぬるい平和ボケな日本から飛び出て、命を賭けて戦争を阻止するための、そういう命の使い方をしたい！！ 自分の力なんてタカが知れてるけどそれでも何もしないよりは現地に行ってみたい！ /もちろん、それで死ぬかもしれない。なんたって相手はアメリカで、空から爆弾がガンガン降ってきたらもうお手上げだ。だけど戦争で死ぬなら死ぬでいい。戦争で死ねたら、私って世界の仲間外れじゃないじゃん！！ 激動の世界情勢とばっちり繋がってるって感じじゃん！ とにかく私は死に場所を探したい！ ということで》、03年2月15日、「人間の楯」としてイラクに行くために、成田空港を飛び立ったと、作家の雨宮処凛は『群像』（03・5）で記し、イラク人について書き留めている。

実は彼女は99年にイラクの国際音楽祭に出演するためにイラクを訪問しており、ここで反米右翼バンドのライブをやり、大統領宮殿に招待されてフセイン大統領の長男、ウダイ・フセイン氏と会見までしてきている。だから今回の訪問はどうしても99年時と比較する筆致になっている。《大音量でコーランが響き渡る中、大量の乗用車がクラクションをひっきりなしに鳴らして走っている。商店街には物が溢れ、イラク人たちは外国人を見つけるとワラワラと寄って来てはニコニコと話しかけてくる。喫茶店では大人たちが水煙草を吸い、子供たちはカメラを向けると撮ってくれと笑顔で殺到してくる。妙に親切で下心のない東南アジアって感じだ。》99年の頃よりも大分経済的には良くなっているという印象で、《また、99年当時お酒はヤミでしか買えなかったのに、今回は堂々と店頭でビールなんか並んでいるではないか。聞けば店の主人はキリスト教徒ということで、なんだかイラクは随分自由になっているという印象を受けた。同じ「悪

の枢軸」国・北朝鮮は毎日が臨戦態勢という感じだが、イラクにはそのような悲壮感や緊張感は微塵もない。パッと見て人々から感じるのは「自由」であり、実際、みんな暇さえあれば勝手に歌ったり踊ったりしていて楽しそうだ。》

彼女は《この街の脱力具合》について、次の見方を提出する。《前回の原稿で、私は「虚構のような戦争という現実の中で、私は今まさに死を突きつけられている人々の生きる姿を見たい」と書いた。／その「人々の生きる姿」が今、目の前にある。／それは、いくら戦争が始まると言われても、学生は学校に行くしかなく、パンを売るお兄ちゃんはパンを売るしかなく、靴磨きの少年は靴を磨くしかなく、タクシーの運転手はタクシーの運転をするしかない、というまごうことなき日常という名の現実だった。／これから戦争が始まるかもしれない、爆弾が自分の上に落ちてくるかもしれないと思っても、彼らは騒いだりせず、淡々と日常をこなしていくしかないのだ。私の目の前にあったのは人が必死に生きる姿であり、そしてその人たちは、自分の無力さを嫌というほど知っていた。イラン・イラク戦争、湾岸戦争、その後の経済制裁下での生活と度重なる空爆。彼らはもう戦争に慣れてしまっているのだ。聖と俗が入り交じった猥雑な街のいつ終わるとも知れない喧噪は、もう覚悟を決めてしまっている人たちの達観のようにも見えた。》

イラク人たちの悲壮感も緊張感もない、屈託のなさそうな「自由」な雰囲気の中に、なるようになる以外に仕方がないといった「達観」を見出して、彼女は続ける。

《そして戦争とは、こんなありきたりな日常の上にある日爆弾が投下され、この街がある日突然戦場になり、たくさんの血が流され死者が出ることなのだ。そう思うと、心底ゾッとした。今この瞬間も、戦争は着々と準備されている。アメリカはすでに23万人の米軍を配備している。それに対して、イランの人々は本当に為すすべもなく日々の暮らしに追われているだけだ。

アメリカはイラクの大量破壊兵器がどれほど脅威であるかを連日プロパガンダしている。しかし、どの国よりも大量破壊兵器を持ち、どの国よりもその大量破壊兵器で民間人を殺し、そしてその大量破壊兵器でこれからイラクの人たちを殺そうとしているのは当のアメリカ自身である。イラクの人々はそれを知りながらも、その地での生活を続けていく以外に選択肢はない。》

同様に、イラク人以外の我々もそのことを知りながらも、自分たちが住み暮らしている《地での生活を続けていく以外に選択肢はない》ような貌付きで、事態の推移をじっと見守ってきた。フセイン政権を倒すアメリカの大義は、彼女たちが見てきたイラクの人々の生活の前では無効であり、ブッシュ政権がやったことは単なる大量虐殺以外の何ものでもありえないことを、以上のレポートは浮き彫りにしている。フセイン政権下であろうとなかろうと、人々は体制の違いを超えて日々の暮らしを営んでおり、戦争は人々のそうした生活と敵対し、破壊する行為であるのはいうまでもない。ブッシュ政権の正義というものはフセイン政権からのイラク人の解放を謳いながら、イラク人の日々の生活を破壊しているという以外にない。

以上の三者のレポートに共通しているのは、フセイン政権の悪政の下に過酷な生活をしいられているイラク人の打ちひしがれた様相という、誰もが抱くにちがいないイメージを裏切って、元気にたくましく自由で闊達^{かつたつ}に生きる人々の暮らし振りであった。しかし、イラク攻撃によってイラクにおびたしい死者と、それをはるかに上回る負傷者が続出し、その大半はイラク人口の半分以上を占める１５歳以下の子供とされる。クラスター爆弾によって身体を引き裂かれた子供たちが、水や薬や麻酔など治療、手術に必要な物資が決定的に不足しているイラクの病院で、本来なら切断しなくてもよい手足が時には麻酔なしに切断されている。バグダッド市内の治安悪化がひどく、電力供給不足に伴う夜ごとの無政府状態、略奪の横行、指導者の不在など秩序の崩壊が進んでおり、前にも記したように、《イラクの状況はしだいにアフガニスタンに似てきている。》

タリバン崩壊後のアフガニスタンの現状については、伝説的なジャーナリストのピーター・アーネット（註 - 彼はイラク国営テレビのインタビューを受けたことで、米NBCテレビから解雇された）が『週刊現代』（０２・１・２６）への独占寄稿で、《私は「タリバンの圧政から解放され、喜びに沸いている」と報じられてきたアフガニスタンの状況を見て、愕然とさせられた。タリバン崩壊後のアフガン内部の混乱と腐敗は、目を覆いたくなるほど深刻だったのだ。》》といて、「いまのアフガニスタンでは、兵士も民間人もすべて“ドロボー”だ」という、現地にいた某メディアの取材記者の呟きを記していた。《久しぶりに訪れたジャララバードは、タリバン時代には想像もできないほど腐敗した魑魅魍魎^{ちみもうりよう ばっこ}が跋扈する無法地帯と化し》、治安の悪化は、《地元の有力者や軍人、ゲリラと化した無法者が、脅迫、ゆすりを繰り返し、食糧援助物資を運んでくる赤十字のトラックにまで、攻撃を仕掛けて》きたり、また窃盗、強盗、レイプが日常的に発生しているために、女性たちは「ブルカ」の着用をやめず、３人の娘を抱えた未亡人の女性は、《昼は物乞いをして生活の糧を得、夜はナイフを握りしめて暴徒から娘を守りながら眠るという》生活が常態化している。

ピーター・アーネットの報告から一年以上経過したアフガンについて、『週刊文春』（０３・４・２４）で「日本国際ボランティアセンター（ＪＶＣ）」の谷山博史・前事務局長の証言が取り上げられている。イラクを制圧したアメリカ政府が「イラク統治はアフガニスタン方式で進めたい」と表明した、そのアフガニスタンは実は今、《泥沼の戦闘状態に陥っている。世界中の目がイラクに注がれた３月２０日にも、米軍地上部隊とアパッチヘリによる、「勇敢なる攻撃」という作戦がアフガンで遂行された。》こうした事態は、「治安維持」ではなく、「対テロ戦争」を重視する米軍の駐留目的からもたらされており、《タリバンの残党やアルカイダの掃討作戦のために、地方のありとあらゆる軍閥を利用したり切り捨てたり、時には互いの対立をも利用しています。米軍がやっていることは融和ではなく、対立を煽っているのです。》

たれ込み情報を拠り所になっている米軍の掃討作戦によって、密告政治がまかり通っているために、対立勢力の一方が「アルカイダ潜伏」の二重情報を米軍に流すと、米軍は

F 1 4 や B 5 2 を使って、その村を爆撃するという事例が頻出して事態はますます悪化していく。米軍の問題点は、N G O の名前を使って情報収集を行ったり、ある敵対人物を暗殺するために、地元民は N G O を米軍の手先と誤解して、《本物の N G O を危険にさらす事態を招い》ていることであり、更に、《地元民を理解していないこと》の実例として、昨年 9 月に起こった事件を取り上げる。

《パクティア県の村で、米軍はタリバンとアルカイダの搜索を行ないました。その時、彼らは各戸別の強制搜索を行ない、男性不在の家に上がり込んだのです。米兵は女性のベールを一人一人力ずくで剥がして、さらにボディチェックを始めました。パシュトゥーン人にとって、家主の許しなく家に上がることは、卒倒するくらい驚愕の行為です。さらに外部の男性に女性の顔をさらすのは、恥辱と見なされます。

この時、あまりの屈辱に若い女性が、銃で二人の米兵を撃ち殺しました。その後、米軍はその女性の引き渡しを要求したのですが、村人たちが拒んだため、F 1 4 と B 5 2 爆撃機によって空爆が行なわれたそうです。

さすがにこの事件は一般の人々の反米感情を高めてしまいました。もともとアフガン国内には米軍の行動を声高に批判する風潮はありません。米軍がタリバンを倒し、今の自由があるのは事実です。また、表立ってカルザイ政権と米軍の政策に反対すると、国際社会から見放され支援が滞^{とどこお}る怖れがある。彼らは面従腹背なんです。

しかし、民族の誇りまで踏みにじる米軍の行為に、アフガン人は日増しに反発を強めています。現地紙は地元民の次のようなコメントを掲載していました。

「女性へのボディチェックはアフガンの女性への侮辱である。ムスリムでありパシュトゥーである我々は、アフガン女性のために命を捨てる覚悟だ」

米軍による爆撃や家宅搜索に反感が高まると、米軍は正体不明のグループに攻撃を受けます。その度に米軍は報復攻撃を仕掛け、一般市民に被害者が出る。そしてまた反感が高まる。まさに悪循環の繰り返しです。》

どこにいるか分からない敵を相手に《米兵たちは地方で厳しい戦闘を強いられ、大変な恐怖に駆られている》ために、《誤爆を繰り返し、理由も告げずに強制搜索や連行を行なう》という事態の連続であるが、《ただ、私は米軍の存在を安易に否定したくありません。米軍による安全があるのも事実です。ある意味重しの役割を果たしている米軍が撤退すると、さらに混乱に拍車がかかってしまう。だからといって、米軍の行為を全面的に受け入れるわけにもいきません。》といて、筆者は《米軍に今すぐ撤退されると困るが、なるべく早く去ってもらいたい。米軍の存在はジレンマなのです。》という J V C のアフガニスタン人スタッフの本音を記す。毎日新聞(0 3 ・ 7 ・ 5) の記事は、6 月下旬に最高指導者オマル師が元閣僚ら有力幹部 1 0 人らによる「評議会」を発足させて、米軍やカルザイ政権軍へのジハード継続を呼びかけるなど、タリバンが住民の保護を受けて復活の兆しを見せていることを伝え、首都カブールの治安はかろうじて維持されているものの、地方の農村部での復興の遅れが要因となって、反政府勢力の不穏な

動きが活発化していることを報道する。

さて、その後のイラク情勢についてである。アメリカ軍によるバグダッド侵攻直後、市内の至る所で大人から小さな子供たちまで参加した略奪騒ぎによって、戦闘時でさえオープンしていた商店や病院などではほとんど閉鎖されていることが報道される中で、最大の事件はバグダッドの西約60kmのファルージャで4月28日夜、米軍が占拠していた小学校の校門前で学校の開放を求める住民のデモ隊に米軍が発砲し、住民ら約20人が死亡した事件であろう(03・6・28付朝日)。調査で住民側に中学生を含む17人の死者が出、その二日後、米軍の発砲に抗議する住民のデモ隊に米軍が再び発砲して、住民3人が死亡。発砲事件をきっかけに住民らイラク人と米軍側の緊張が高まり、5月27日未明、イラク人グループが警備の米兵をロケット砲などで襲撃し2人を殺害するなどの米兵への攻撃が相次ぎ、米軍は現在1500人以上の部隊を派遣し、鎮圧を図ろうとしている。

6月15日午後4時半頃、バグダッドから北へ約40kmの町ムジャヘダの市街地に停車していた米陸軍第3歩兵師団の装甲車とトラックがロケット砲による攻撃を受け、米兵8人が負傷、うち2人が重傷だという。30分後には、更に北へ約30km離れたドウジャイルで同様な襲撃事件があり、米兵1人が負傷し、いずれも容疑者は捕まっていない。(以上、森暢平『サンデー毎日』03・7・6)

イラク駐留米軍に対する攻撃が組織的な反占領闘争の様相を帯び始めているのは、6月18日、バグダッドの連合軍暫定当局前でイラクの元軍人ら数千人が繰り広げた年金・給与要求デモに米兵が発砲し、元軍人2人が死亡する流血の事態に発展したことなどからも読み取れる。元軍人(31)は「米兵ではなく私たち軍人が街をパトロールするのは当然だ。23日までに米軍から給与や復職について満足のいく回答がなければ、米軍に対する軍事作戦を開始する」と対米闘争を宣言し、別の一人(23)も、「米軍を解放者と思ったが、占領者であることが分かった。我々は毎日、米兵を殺害する用意がある」と警告する。同じ18日、バグダッドの北約120キロのサマラで、米軍管轄の人道支援事務所が砲撃を受け、イラク人1人が死亡、12人が負傷。19日にはバグダッド南部で米軍の救急車両が待ち伏せ攻撃に遭って米兵一人が死亡するなど、米兵や対米協力イラク人を狙った攻撃は激しさを増している。(以上、03・622付毎日新聞)

イラクだけでなく、サウジアラビアの首都リヤドで5月12日夜、大規模な連続自爆テロが、4日後の5月16日夜、モロッコ最大の都市カサブランカでも同時多発の爆破テロが起き、いずれも「アルカイダ」の関与が疑われている。バグダッド周辺では6月以降、米兵を狙った攻撃が急増し、車列への待ち伏せ、地雷攻撃、至近距離からの銃撃等、手口は次第に大胆になってきており、検問が強化される中で、米兵の次の一言が現在のイラク情勢をいいあてているにちがいない。「戦争の間は、誰が敵かは明らかだった。でも今は、イラク人すべてが敵に見えてしまう」(03・7・5付朝日新聞)

2003年7月12日記